



## 年間第 23 主日 (マタイ 18:15-20)

イエスの光に照らされるように忠告し、導く

「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。」(18・15)「忠告する」とか、「戒める」というのはなかなか簡単ではありません。聞き入れてもらえる何かの手立てを、イエスのことばから持ち帰りましょう。

台風 10 号が迫っています。台風 9 号でも東側のモチノキが折れ、聖堂東側の瓦に当たって瓦を落としました。信徒会館から教会の石段に下りていく入り口にあった大きな梅檀の木も、根もとから折れました。今度の 10 号ではいったいどれだけの被害になるのか、気が気ではありません。9 号では幸いにステンドグラスを割られていませんが、どこか一カ所割れると、風が侵入して聖堂内は滅茶苦茶になるでしょう。

今晚私は、司祭館を諦め、信徒会館に寝ることにします。信徒会館で、台風が過ぎ去るまで、たくさん祈ろうと思います。小石が飛んで、ガラスを割りませんように。周りの木が、被害をもたらす凶器になりませんように。生向のボート、頼る人がなくて浮かべたままですが転覆しませんように。そして最後に、どこからかお中元の残り物の缶ビールが飛んできますように。いろいろお祈りしたいと思います。

福音に戻りましょう。「忠告する」のは容易ではありません。「お前に言われる筋合いはない」とばかりに、拒否されることも考えられます。最近では司祭が説教することさえ、「NHK ニュースを見たぞ。お前に言われる筋合いはない」と言われそうです。それでも、心からの忠告を聞いてもらう何かの手立てがあるはずです。

こう考えました。「忠告する」という行為が、福音朗読の結びの「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(18・20) ことと繋がるようにすれば良いのではないのでしょうか。「忠告する」場面が、「二人または三人が、イエスの名によって集まっている」そういう場になっていれば良いわけです。

前にも話したことのある失敗談ですが、今回も例に引こうと思います。今は司教様になった白浜司教様が高校三年生で神学校の生徒会長だった時、やんちゃだった私は後輩を連れて屋根裏から屋上に上がり、遅くまでおしゃべりしたことがありました。消灯時間過ぎて抜け出したのですから当然規則違反です。話し疲れて帰ることにしたら、屋上と屋根裏をつなぐ扉のところで、白浜先輩が待ち構えていました。

40 年前の話です。当時ですから「グー」で殴られても不思議ではありませんでした。心の中では覚悟していましたが、白浜先輩はこう言ったのです。「話は終わったね？もう遅かけん、戻って休まんね。」私にとっては「グー」で殴られたくらい白浜先輩の言葉は刺さりました。もちろんそれ以降は、同じ真似はしませんでした。

当時の白浜先輩の「忠告」は、どうして私の胸に刺さったのでしょうか。反抗期の中学生の私に、

そんなことは関係なかったと思います。そうではなく、私が先輩から忠告を受けた時、聖書の言葉が実現していたからだと思います。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」

屋根裏で引き留められ、注意を受けた時、真っ暗だったはずですが、忠告を受けた私たちは照らしを受けていたのです。イエスの光で照らしを受け、過ちが明白になり、もはや説明の必要も無いほど、理解できたのです。

当時から「白浜聖人」とまで言われていた先輩のおかげで、そこにイエスがおられたのです。正しい道を選び続けなければいけない。たくさんの言葉は必要なくて、そこにイエスがおられるだけで、言うことを聞き入れ、立ち直ることができたのでした。

忠告することは難しい務めです。忠告されたことをいつまでも根に持つ人も現れるかも知れません。それでも、私たちは兄弟への忠告を、イエスが示す愛に倣って行いましょう。真に忠告する戒めは、滅びを望まぬ神の愛の表れなのです。

年間第 24 主日(マタイ 18:21-35)